

地域言語としてのピジン・ジャパニーズ

—文献に見られる 19 世紀開港場の接触言語—

ダニエル・ロング

1. 開港場のピジン・ジャパニーズ

かつて、ピジン日本語がいくつかの地域で日本人と外国人との間で共通言語として使われていた。それは横浜や長崎、神戸といった開港場を中心とする地域であった。日本人と他言語の話者が出会う接触場面では「臨時的な言語」(makeshift language)が自然発生的に生じることが多いが、19 世紀後半の港町や異人街周辺で使われていたピジン日本語は言語接触あるいは国語史の研究者にとって極めて重要な対象である。その理由は次の 5 つの要因にある。

(1) 個人間の均一性。個人による差、あるいは母語による差(日本語、英語、中国語など)があったものの、それを超えた共通性と均一性があったと考えられている。(2) 地域間の均一性。この均一性は同一地域内だけではなく、地理的に離れた町(横浜、神戸、長崎)で使われていたピジンにも共通性が見られた。(3) 継続性。このピジンは少なくとも数年間使われており、ある程度継続性をもったものと考えられる。(4) 連続性。19 世紀後半に使われていたこのピジンは、第二次世界大戦後の日本で米軍と日本人との間に使われていた極東ピジン英語(いわゆる Bamboo English)に通じるところがある。(5) 土着性。20 世紀の日本語(方言や全国共通語)にもこのピジン日本語の痕跡がわずかながらも見られることがわかる。

Daniels (1948)はこの横浜ピジンの語彙を語源的に分析した。カイザー(1998)はこれに続いてこのピジンの音韻体系や文法を分析した。本稿では、このピジンのその後の行方を追う。すなわち、このピジンが日本人どうしのことばに入り込んだことが分かった。さらに、この 19 世紀開港ピジンが、20 世紀半ばに駐留する米軍と日本人との間に使われていたいわゆるバンブー・イングリッシュにもつながるところがあることが分かった。

明治 12 年(1879)に、横浜在住のイギリス人が西洋人のために横浜ピジンの教科書を書いた(Atkinson 1879)。簡略化された日本語文法を基礎に、様々な言語の単語が混ざっている。次の例文では、上の行は教科書で使われている綴り、中行は語単位の訳、下行は原文に載っている英語を日本語に意識したものである。

1. Watarkoosh' nang eye chapeau arimas
私 長い シャツポあります
高くて白い帽子がほしい。
2. Consul bobbery sto
コンスルボベリー人
弁護士
3. Champone hanash
チャンポン話し
言語を混ぜて使う

4. Mar chobber chobber shinjoe
馬 チャバチャバ 進上
馬に餌を与えなさい。
5. Num wun your a shee arimas?
ナンバーワンよろしいあります
一番いいものが見たいんですが。
6. House arimasen. Skoshee high kin maro maro arimas.
ハウスありません。少し 拝見 回る回る あります
私はこの家の人ではありません。私はあちらこちら回っている人です。
7. Sigh oh narrow dozo byne-bai moh skosh cow.
さよなら どうぞバイバイもう少し買う
感謝しています。私は西洋人を高く評価しています。引き続きご愛顧のほど
お願いいたします。

上の例から分かるようにこのピジンには複数の言語が関与していることがわかる。*consul* (領事) や *house* (家) のような英単語が最も多いが、それ以外の言語もある。フランス語の *chapeau*、ポルトガル語の *sabão* に由来する *shabone*、中国語の「埃和」に由来する *champone* などはこれに当たる。

一方、当時西太平洋を行き来する船乗りの間で使われていた「海上ピジン」から入ったと思われる単語も見られる。英語の *number one* の簡略形である *num wun* (一番、最高) や二重化の *sick-sick* はこれに当たる。*bobbery* (騒動) はヒンディ語の *bāp re!* (お父さんよ!) に由来すると思われる単語で、インド洋や東インド諸島のピジンで広く使われていた。*bynebai* (そのうちに) は太平洋地域のほとんどのピジンに見られる(Clark 1979)。

2. アマ

横浜ピジンの教科書には *amah* (子守り女) や *chi chi amah* (里親) といった単語が記されている。*ama* は、上述の *bobbery* や *bynebai* と同様、インド洋や東太平洋の海上英語で広く使われていた。¹この単語は、世界のさまざまなピジンに多大な影響を残したポルトガル語に由来する。原形の *ama* はポルトガル語でも「乳母、保母」といった意味である。

アマ (名) 今、横浜など、開港場にて、外国人に雇われ居る、日本の子守女を、アマという。罵る意なし (『大言海』)

アマは開港であった神戸に残っているだけではなく、西洋人の語だという説明がついている。海に面した他の地域 (志摩、愛媛、石垣) で類形が見られるのは関係ないと思われる。

あま (15) 「あまさん」兵庫県神戸市 (西洋人の家の女中) 670。 (16) 子守。

¹ 19 世紀のインド英語を記録した本によると、*amah* は “wet nurse used in Madras, Bombay, China, Japan” である (Daniels 1948 に引用されている Yule and Burnell 1886)。

子守女。三重県志摩郡 585。「あんま」沖縄県石垣島 996 (17) 乳母。「あんま」愛媛県 (『日本方言大辞典』)

アマ【名】(英 amah² ポルトガル ama 中国阿媽) ①日本や中国などに住んでいる外国人の家庭に雇われていた現地人の女中。メイド。* 或る女〈有島武郎〉後・二二「西洋人の子供達が犢(こうし)程な洋犬やあまに付き添はれて事もなげに遊び戯れてみた」* アエ³・マリア〈谷崎潤一郎〉二「もっと気の利いた家に這入って、コックやアマの二三人位は使へさうなものではないか」* 魔の河〈火野葦平〉一五「母を助けて阿媽(アマ)として働いた」②外国航路の汽船で働く女性。補注 中国語の「阿媽」はヨーロッパ語の amah, ama とは無関係かもしれない。(『日本国語大辞典』)

なお、上述の文学作品の年代は、『或る女』1919年、『アエ³・マリア』1923年、『魔の河』1957年である。在日西洋人との関係でアマを使っている2つの作品は大正時代に書かれたものである。

中国の港町から発生した Chinese Port Pidgin English は太平洋各地のピジンの基盤になっているとされているが、この横浜ピジンは特にその影響が大きい。それゆえ、この辞書で挙げている中国語の「阿媽」はピジンから中国語に入った借用語で、この漢字は当て字かもしれない。

3. チャブ

横浜ピジンの本には次のような単語や例文も見られる。

1898年の『言泉』にチャバの変形と思われるチャブが登場しており、日本人の間で使われるほど普及していたことが分かる。しかも、単独形だけではなく、複合語のちゃぶ台やちゃぶ屋も誕生している。また、「俗語」を意味する「俚語」の使用域ラベルが付いているとはいえ、3語のうち2つは特に外国人と結びついていないことから、日本語としての定着していたことが分かる。

ちゃぶちゃぶ【名】 食事をすること。〔俚語〕 (『言泉』)

ちゃぶだい 卓袱台【名】 『ちゃぶは卓袱の支那音 Cho-fu の訛。卓袱屋参照。食事する時に用いる四脚の台。食盤。食卓。(『言泉』)

ちゃぶや 卓袱屋【名】 『卓袱台を見よ』
(『言泉』)

チャブ(名) 喫飯 [ちゃぶは、茶飯の支那音(cha-fan)の訛か、或は言う支那語卓袱(cho-fu)の訛か、又は米国湾にて支那料理のことを、ちゃぶすい(chop-suey)と言うより、転ぜしならむと言う] 食すること。(『大言海』)

² 英語の amah は海上英語に入ったポルトガル語起原の単語である。

チャブだい (名) 食卓 [ちゃぶ(喫飯)の条を見よ。或は言う、卓袱臺の支那音の訛と] 食事用の脚ある臺。食盤。食台。(『大言海』)

チャブや (名) 飲食店 [ちゃぶ(喫飯)の条を見よ。] 開港場などにて、主として外国人を目的とする簡易なる飲食店。(『大言海』)

チャイニーズ・ピジン英語には *chow-chow* という語形がよく見られる。また英語の軍隊スラングとして広く使われている *chow* もこれに由来すると思われる。³ただし、これらと横浜ピジン英語の *chobber* や日本語のチャブは関係しているかどうかは明らかではない。

4. サランパン

横浜ピジンの教科書に頻繁に出現するのは「壊す」を意味する *serampan* である。「小船が壊れている」は *boto serampan* (ボート セランパン) となっている。ピジンの一つの特徴は、複雑な概念を表わすために、新たな形態素を使うのではなく、数少ない語彙をつなげて複合語を作ることにある。横浜ピジンの、「海上保険積算士」を意味する *serampan funey high kin donnyson* (セランパン 船 拝見 旦那さん) にこうした現象が見られる。「灯台」は *fooney high kin serampan nigh rosokoo* (船 拝見 セランパン 無い ろうそく) である。それに、*jiggy jiggy fooney high kin serampan nai rosokoo doko?* (直々 船 拝見 サランパン 無い ろうそく どこ) という文は「最寄の灯台はどこですか」の意味として解説されている。

このピジンを使っていた英語母語話者の発想によると思われる表現も載っている。例えば、「この馬を馴らしてもらいたい」という意味で *mar serampan* が書いてあるが、これは英語の“I wish to get this horse broken”という表現を直訳したものであると思われる。

仮名垣魯文著の『安愚楽鍋』(1871~1872)の序に当たる部分にこの単語がサランパンという形で登場している。

ほとけの五戒さらんぱア (『安愚楽鍋』138頁)⁴

そして、同書の「茶店女の隠食」という話では、牛鍋屋にお客さんとして来ていた茶屋の女と異人さんとの間にトラブルが起き、それを抑えようとする別の客が次のセルフを言っている。

「おほほほ。まっぴらまっぴらつい話しに実が入って、そうそうもうもう後はさらんぱあにして、さあ注ぎ直し、お酌をしまほう」(『安愚楽鍋』163頁)

この表現はのちに、「さらんぱ」という形で長崎市方言として記録されている。

さらんぱ 破壊するさま。割るさま。成立しないさま。また、そのこと。長崎市062(長崎方言集覧(古賀十二郎)=長崎市史1925年)、「さらんぱする」906(風俗画報127号)(『日本方言大辞典』)

³ Oxford English Dictionary (1994)によると、*chow-chow* が英文に始めて登場するのは、1795年である。最初は中国のピジン英語であったが、その後使用範囲がインドまで広がった。

⁴本稿で示している『安愚楽鍋』の頁番号は興津要編(1966)によるものである。

そして、サランパンという形で現在の国語辞典にも載っているのである。

さらんぱん【名】(マレイ語 *sarampang* から。また、フランス語 *ce-la-ne-pas* (無くなせり) から出た語かともいう) 物品がこわれたり、または約束が破れたりすること。めっちゃめっちゃ。元も子もなくなるという意に用いる。(『日本国語大辞典』)

5. ペケ

この横浜ピジンで、現代の共通語で最も定着している単語はペケである。Atkinson (1879) の教科書には次のような例文が出てくる。

Caberra mono piggy (かぶり物ペケ=帽子を取りなさい)

Nanny sto hanash, watarkshee boto piggy (何人話す私ボートペケ=私を探している方がいれば、私がボートで港を回っていることを伝えなさい)

ところが、西洋人向けのこの教科書が出版された当時、ペケはすでに一般の日本人の間で知られつつあったようである。『安愚楽鍋』の中の「歌妓の坐敷話」では「ペケ」という単語が出てくる。

「この間寿仙へわちき(私)の知っているシャボンさんという異人さんが来て、牛肉を持って来て芸者に食べろと言うと、一座が、おたまさんに、ふく松さんに、小みつさんに、おらくさんサ、みんなが異人慣れないもんだから、嫌がって逃げて、歩くのを面白がって、追っかけちらして、おらくさんを捕まえて無理に口の端へ持っていったもんだから、おらくさんが大声をあげて泣き出したはね。そうするとみんなが異人さんをとめて牛肉をペケにさせよう思ってさ」(『安愚楽鍋』149頁)

同じ『安愚楽鍋』の中の「茶店女の隠食」という話では、茶屋の女が以前に出会った西洋人について語っている部分がある。

私のそばへ来て、『あなた異人ペケありますか。』『わたくし、あなたたいさんよろしい』と。(『安愚楽鍋』163頁)

1898年出版の『言泉』にもペケは西洋人が持ち込んだことばとして記されている。

ペケ【名】『支那語不効(元が切れる、即ち原価を償い得ぬ義)を、我国に滞留せる西洋の貿易商人の訛りて用いし語』価値の無きこと。だめ。〔俚語〕(『言泉』)

隠語辞典にも「ペケ」が載っているが、横浜や神戸のような開港場から広がったことがここでも明らかにされているのである。

ペケ 不可。不成立。破談。悪い。などの意。不可の支那音の訛りとも、又馬來語 *Pergi* の転化なりともいう。横浜神戸湾の商業用語としては、買主(主に外国商館)が商品買収の談合を中止し受渡しを拒絶することを言い、その商品を「ペケ品」などという。(『秘密辞典』)

そして昭和初期に出版された『大言海』でもペケと港町、そして商売との関係が浮かび

上がっている。

ペケ(名)〔馬來語、ペッジ(Pergi)より出ずという説と、支那語プコ(不可)の転訛なりという説との二あり、されど、前節を是とすべし(新村出の説)〕 悪し、気に入らぬ、帰れなどの意を表わす語。滑稽道中膝車(文久)十「カンジンの間に合わねえじゃ、ペケだというだろうし」(元治元年刊[1864年]、横浜みやげ、巻末附載の異国言葉語彙表に、気に入らぬ、物を捨てる、人をかいたす、邪魔になる、売り買い破綻(商談破裂)等に、ペケの語をあてたり)(『大言海』)

ペケが短い間に全国に広がったことは、以下の方言辞典の記述から分かる。

ペケ (中国語の「不可」の転か) ①拒絶するさまに言う語。だめ。いけない。山形市周辺。茨城県稲敷郡 群馬県勢多郡 「あいつはペケだ」236 佐渡郡 千葉県印旛郡「約束がペケになった」 新潟県佐渡 「ペケく(断れる)」福井県敦賀郡 岐阜市 静岡県志太郡 「いっぺんでペケになった」 和歌山県 岡山県児島郡 山口県 文献例 伎 八幡祭小望月賑 四幕「『それでは、情人(いろ)だといった新助は』『少しペケさね』」 ②順番の最後。びり。栃木県 島根県 「ぼけ」 栃木県足利市(『日本方言大辞典』)

その後、ペケは様々な意味合いで、全国に広がったのである。なお、以下の国語辞典で引用されている「ペケ」を使った歌舞伎の脚本は、開国直後の1860年に書かれていることが興味深い点である。⁵

ペケ【名】(語源については未詳) ①(形動)拒否、拒絶するさまにいう語。だめ。いけない。気に入らぬ。また、役に立たないこと。間の抜けていること。また、そのさま。*歌舞伎・八幡祭小望月賑(縮屋新助)四幕「『それでは、情人(いろ)だといった新助は』『少しペケさね』」*安愚楽鍋(仮名垣魯文)二・下「相談のできかかったきやくにペケにされたり」*海に生きる人々(葉山嘉樹)二六「ゴム長靴のペケを利用して」②(駄目の意で)ばつじるし。Xの印。ばってん。③盗人、また、てきや仲間の隠語。(イ)娼妓。売春婦。〔隠語韓覧〕(ロ) («ペケ」とも)外国人。〔隠語韓覧・特殊語百科辞典〕(ハ) («ペケ」とも)雨天。〔隠語韓覧・特殊語百科辞典〕語源説 (1)マレー語。pergiの転訛〔外来語の話=新村出・大言海・ことばの事典共=日置昌一・上方語源辞典=前田勇〕(2)中国語の「不可(puko)の訛〔ことばの事典=日置昌一・すらんぐ=暉峻康隆・外来語辞典=楳垣実〕(『日本国語大辞典』)

このペケはマレー語と中国語のどちらから入ったかはそもそも無意味な議論である。東アジア(あるいは西太平洋)のさまざまな接触言語に中国語(人)とマレー語(人)が大きく貢献していたことは疑いの無い事実である。複数の言語の話者が接触している状況では、異なる言語の単語が偶然で似たような意味で使われていると(原義とは違っても)、その単語の普及に拍車がかかるであろう。中国人は母語の単語をほぼそのまま用いること

5【八幡祭小望月賑】通称『縮屋新助』。河竹黙阿弥作の四幕からなる世話物である。万延元年(1860)に江戸市村座にて初演。文化四年の深川八幡祭の雑踏で永代橋が落ちた事件と、深川芸者が刺殺された事件とを合わせて脚色したものである。

ができるし、マレー人も同様である。そして、両者の言語が理解できない西洋人も似た意味で使われている両方の単語を耳にしているのです、彼らもこうした表現をいち早く習得するであろう。

6. ポンコツ

明治時代の横浜ピジンには「処罰、殴る」という意味の *pungutz* がたびたび登場する。Leland 1879 には、*bonkots* という形も出ている。このポンコツは 1935 年の国語辞典に記載されている。

ポンコツ（「拳固」の見出し語の記述）ぼんこつは、洋人が国語を聞き誤れるなるべし。開港場などにて、洋人は、ぼんこつという。拳「拳固で頭をはる殴る」、「げんこつを食わせる」「ぼんこつ進上」（『大言海』）

なお、ポンコツは「拳骨」から来たという説よりも、むしろ、開港場のピジンで使われていた *pungutz* に由来すると考えるのが自然であろう。この *pungutz* は上述のサランパやペケと同様マレー語 *pungut* に由来すると考えられている。

ポンコツやボンコツが各地の方言にも見られるが、肝心な「殴る」の意味として残っているのは、やはり開港だった長崎である。上述見たように、サランパが使われているのもこの長崎地域である。

ぼんこつ ①げんこつ。静岡県志太郡（軽く打つもの）535 「ぼんこつ、ぼんこし」長崎市「ぼんこつかむしょう（かましてやるぜ）」906 ②牛馬を殺すこと。山梨県南巨摩郡 465 ③頭。島根県鹿足郡 725 ④魚、かまつか（鎌柄）。島根県鹿足郡 725（『日本方言大辞典』）

現在の共通語で「ぼろぼろの車」の意味で使われているポンコツもこのピジン日本語の単語から発生したと考えられる。以下の国語辞典の抜粋では、ポンコツということばも明治開化期の代表的な文学作品で使われている点が注目される。

ぼんこつ 【名】①拳骨（げんこつ）でなぐること。また、なぐって殺すこと。屠殺。*安愚楽鍋〈仮名垣魯文〉三・当世牛馬問答「四足をくいへゆわいつけられてポンコツをきめられてヨ」②自動車の解体・転して、中古の、こわれかかった自動車。一般に、老朽化し、廃品同様になったものにもいう。補注（1）①については、拳骨を西洋人が聞き違えていったポンコツの転か〔大言海〕とする説が有力であるが、「げんこつ」と英 *punish* との混成語か。（2）②は、昭和三四年の阿川弘之の新聞小説「ぼんこつ」によって一般にひろまった。（『日本国語大辞典』）

ポンコツは以下のような意味変遷をたどったと推測される。

手にする → 殴る → （意味の強化）殴って殺す → 屠殺（動物の解体） → （同じ社会階層が仕事としてやっていた）自動車解体（屋） → ぼろぼろの車

現代共通語のポンコツと開港場ピジンのそれを結びつける鍵が 1898 年に出版された国語辞典に見られる。「ポンコツ」の定義には、人を殴ること屠殺の意味の両方が記載され

ている。

ぼんこつ【名】『叩く音に擬していえる語』①拳固にて、人を打ち叩くこと。〔俚語〕②牛馬などを屠殺すること、又その職業。〔俚語〕（『言泉』）

この変遷の背景にあったプロセスは次のように説明できる。マレー語 *pungut* (手にする) に英語の複数形の 's' が付き (数回の打撃)、*pungutz* となった。日本語の起源ともされている「ポンポン」や「拳骨」が関与し、母音が[u]から[o]に変わった。

ペケやポンコツがこの開港場ピジンで使われていたときの意味と原語の意味は多少ずれているので、ここ述べた起原説を疑わしく思われる読者もいる。しかし、考えてみれば、これらの単語が日本語に入ってから短期間でも意味がずいぶんと変化している。それに、開港ピジンの他の単語にもマレー語起原の単語が複数見られる事実と合わせて考えると、この起原説は十分可能であろう。

7. おわりに

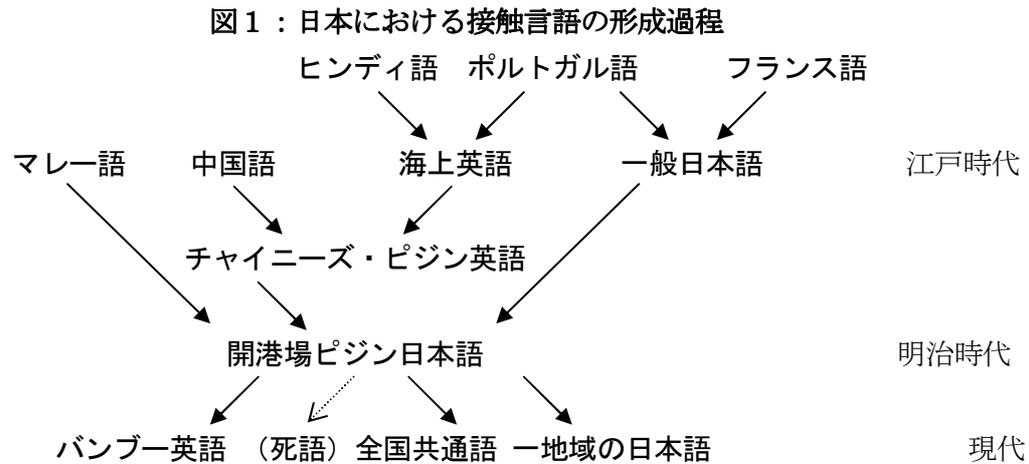
これまでの研究で、19世紀後半から20世紀にかけて、日本の開港場でピジン日本語が使われていたことがわかった。それは、大胆に簡略化された日本語の文構成に外国語の語彙を大量に取り入れた言語であった。言い換えれば、日本語を基層言語(*substrate language*)、そしてマレー語、中国語、英語など複数の言語を上層言語(*superstrate language*)とする接触言語であった。その複雑な形成過程の一面を図1で現している。

本稿で見てきた国語辞典や方言集の記述から、このピジン日本語が横浜、神戸、長崎で、主に外国人と彼らと接触する日本人とのコミュニケーション手段として利用されていたが、いくつかの単語が後に一般の日本人の理解語彙あるいは使用語彙に入ったことがわかった。このピジンの行方を考えると、単語を3種類に分類できる(図1)。(1)その後使われなくなって死語となったもの。(2)異人とのコミュニケーション手段としての役割を超えて、日本人どうしのことばに入ったが、開港の周辺に止まったので、その地域言語(方言)となったもの(神戸のアマ、長崎のサランパなど)。(3)形や意味を変えながらも、全国に広がり、共通語となったもの(ペケ、ポンコツ、チャブ)。(4)さらに、いくつかの語が20世紀半ばに駐留の米軍兵士と日本人との間で使われていたいわゆるバンブー英語(*Bamboo English*)にも見られる。

この二つのピジンに共通して使われた単語には基本語彙が含まれている点が注目値する。19世紀の資料に出てくる *moose me* (女性)、*chobber-chobber* (食べ物) *skoshe* (少し) は20世紀には *mus, moose* (女性の恋人)、*chow-chow* (食べ物、食べる)、*chop-chop* (食べる)、*skosh* (少し、小さい) に見られる(Norman 1954, 1955; Webster 1960; Goodman 1967:55)。⁶これは果たして偶然の一致なのであろうか。半世紀も離れているこの2つの接

⁶ Norman (1955: 44)の説明は、“*Sukoshi* means ‘little’ in Bamboo English as well as ‘some’. A girl may be described or designated as *sukoshi*. . .”となっているので、*skosh* は日本語の「少し」以外にも「小さい」の意味で使われていたことが分かる。*Taksan* は「沢山」以外にも「非常に」の意味で使われていた。*Atkinson*(1879: 28)は *taksan sammy arimas* (非常に寒いです) を記している。*Algeo* (1960:122) も同様に、*taksan dai-jobee* (非常によろしい) という例文を挙げている。

触言語を結びつける具体的な手がかりは現在のところで見つかっていないので、更なら研究が必要である。⁷



このピジンは当初、外国人と日本人との間のコミュニケーション手段として使われていた文字どおりの接触言語に止まっていたが、1870年代から、外国人との付き合いのあった日本人の普段使うことばにもこのピジンの単語が見られるようになった。当時の文学作品だけではなく、国語辞典にまで登場している。すなわち、このピジン日本語のいくつかの表現が、19世紀末から今世紀の前半にかけて、外国人（西洋、中国、東南アジアの人）の多い港町の地域言語に入り、そしてわずかながら全国にまで広がった単語もあったのである。

参考文献

Algeo, John T. 1960. Korean Bamboo English. *American Speech* 35: 117-123.

Atkinson, Hoffman [Bishop of Homoco]. 1879. *Exercises in the Yokohama Dialect*. Yokohama: privately printed (reprinted in 1915 and 1953)

Chamberlain, Basil Hall. 1890. *Things Japanese; being notes on various subjects connected with Japan for the use of travellers and others*. London: K. Paul, Trench, Trübner & Co., Ltd. (日本語訳 1994『日本事物誌』高梨健吉訳 平凡社)

Clark, Ross. 1979. In search of Beach-la-mar: Towards a history of Pacific Pidgin English. *Te Reo* 22: 3-64.

Daniels, F. J. 1948. The vocabulary of the Japanese Ports Lingo. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. Volume 12, part 3 & 4: 805-823.

Goodman, J. S. 1967. The Development of a Dialect of English-Japanese Pidgin. *Anthropological Linguistics* 9.6: 43-55

Leland, C. G. [anonymous] 1879. A New dialect; or, Yokohama pidgin. *New Quarterly Magazine* 2:114-124.

Norman, Arthur. 1954. Linguistic Aspects of the Mores of U.S. Occupation and Security Forces

⁷ なお、終戦直後に書かれたエッセイでこの明治初期のピジン日本語に注目しているものがある(服部之総 1947)。

in Japan. *American Speech* 29: 301-302.

Norman, Arthur. 1955. Bamboo English: the Japanese influence upon American speech in Japan. *American Speech* 30.1: 44-48.

Oxford English Dictionary, 2nd ed. 1994. Oxford: Oxford University Press.

Webster, Grant. 1960. Korean Bamboo English Once More. *American Speech* 35: 261-265.

Yule, Henry and Arthur Coke Burnell. 1886. *Hobson-Jobson: being a glossary of Anglo-Indian colloquial words and phrases and of kindred terms etymological, historical, geographical and discursive*. London: John Murray.

大槻文彦 (1935) 『大言海』富山房

落合直文 (1898-99) 『日本大辞典 言泉』大倉書店

カイザー・シュテファン (1998) 「Yokohama Dialect ——日本語ベースのピジン——」『国語研究論集』汲古書院、83-107

仮名垣魯文 (1871-72) 『安愚楽鍋』(収録: 興津要編(1966)『明治文学全集 1 明治開化期文学集 (一)』筑摩書房。)

自笑軒主人 (1920) 『秘密辞典』千代田出版部 (復刻本: 1996『近代用語の辞典集成 38』大空社)

『日本国語大辞典』(1976) 小学館

『日本方言大辞典』(1989) 小学館

服部之総 (1947) 『*Moods Cashey*』真善美社。(再録: 1966『黒船前後: 服部之総随筆集』筑摩書房 [筑摩叢書 71])

謝辞 本稿の研究に当たって、ご指導下さった筑波大学のカイザー・シュテファン氏、およびメーリングリスト AN-LANG (Austronesian Languages and Linguistics=オーストロネシア諸語言語学) でマレー語などに関する情報を提供して下さい下さった Ross Clark, Lex van der Leeden, Waruno Mahdi, Bernd Nothofer, Phil Quick, Ben Zimmer に感謝を申し上げます。